

アークフラッシュ施工された老人施設からは5年間インフルエンザの発症が報告されておりません。

<<通販開始>> <http://homepage2.nifty.com/arc-clean/>

<<鳥インフルエンザ>>

東アジアサミットに参加した16カ国首脳は14日、東南アジアや中国などで再流行している鳥インフルエンザ抑止のための具体的協力を示した首脳宣言を発表した。

宣言は「域内の多くの国で流行が拡大し、家禽(かきん)産業だけでなく、貿易や観光にまで深刻な影響を及ぼしている」と指摘。「現在のH5N1型ウイルスが新型インフルエンザの大流行を引き起こす型に変異する可能性や大流行発生を予測することは不可能だ」との危機感を表明した。

そのうえで(1)国・地域レベルで新型インフルエンザ大流行への準備戦略を確立(2)サミット参加各国や国際機関での情報共有手続きの策定(3)ワクチンと抗ウイルス薬の供給や製造での協力強化などの対策を打ち出した。

東アジア共同体に向けての具体的な構想などが打ち出せなかったサミットの中で唯一、喫緊の「アジア全域の脅威」として方向性を打ち出した格好の議題となった。

<<またまた発生>>

中国保健当局は15日、同国で6人目の鳥インフルエンザ感染者が発生したと明らかにした。

新華社の報道によると、感染したのは、江西省在住の35歳の男性。世界保健機関(WHO)もこの事実を把握しているという。

ジュネーブのWHO本部の広報担当者は「男性は重態のもようだ。WHO北京事務所にきょう連絡が入った。この地域はこれまで人の感染例は報告されていない。男性は過去に家禽と接したと思われる」と述べた。

新華社は、患者は行商人で、4日に熱と肺炎の症状を訴えて発病した、と報じている。

<<環境>>

日本各地の沖合に大量に流れ着き、漁業被害が深刻化しているエチゼンクラゲなど巨大クラゲをめぐる日中韓合同対策会議が十五、十六の両日、上海で開かれた。日本は有効な対策を講じるため、三国による共同調査を来年五月から実施するよう提案したが、大量発生源を「中国沿岸の東シナ海と韓国沿岸の黄海」とする日本側に対し、中国側は「あいまいな説。発生源はまだ確定していない」と疑義を呈すなど日中間の溝は鮮明であり、中国沿岸の共同調査は難しそうだ。会議参加者によると、今年、日本沿海にはエチゼンクラゲが大量に流れ着いており、「最も多かった〇三年の十倍から百倍」(日本側参加者)と推測されている。大量発生の原因については、広島大学大学院の上真一教授ら日本側は調査結果を基に、海水の温度上昇 東シナ海に流れ込む長江が(工業

排水などで)汚染され、窒素濃度が上昇するなど海が富栄養化動物プランクトンを餌とする魚の乱獲でプランクトンが繁殖 - などの点を挙げた。その一方で、日本海ではエチゼンクラゲの子供が発見されていないことを指摘、発生源は「中国沿岸の東シナ海、朝鮮半島沿岸の黄海」と位置づけた。上教授は、瀬戸内海で別のクラゲが大量発生した原因と類似している点などを踏まえ、大量の若いエチゼンクラゲは海流に乗り成長しつつ七月には九州西部、対馬海峡を抜け、日本海を北上(一部は太平洋側から瀬戸内海へ)、十月には津軽海峡を抜け、三陸沿岸、房総半島に達しているとした。上教授は産経新聞に対し、「大量発生は中国の汚染と大いに関係する可能性がある」と話すが、中国水産科学研究院東海水産研究所の程家主任研究員は「発生源が(成熟したクラゲのいる)日本海という可能性は大いにある」と反論した。程研究員は報告で、日本側の主張を全面否定はしないものの、環境汚染との因果関係は不明であり、発生源の中心は「(汚染されていない)黄海の深い場所」と言及。若狭湾の原発の影響も否定できず、漁業資源衰退との関係も分析が難しい - などと疑問を呈した。ほかにも、「調査では浙江省の沿岸などにエチゼンクラゲの親はおらず産卵場ではない」(浙江省海洋水産研究所の徐漢祥所長)などと反論が相次いだ。複数の中国側参加者は中国領海内での共同調査には消極的。日本側からは「発生源が特定されるのを避けたいからだろうか」との声も出た。対策会議には、日本から水産庁と水産総合研究センターの職員、大学研究者、中韓からは国の研究機関の専門家ら計五十人が出席した。

<<シックハウス>>

自宅の防水工事で、手足がしびれるなどの症状が出たとして、神戸市の本田仁義さん(60)、紀美代さん(59)夫妻が「体調を崩したのは工事に使われた化学物質が原因」などと、建築会社など三社に損害賠償を求めた訴訟は六日、神戸地裁(紙浦健二裁判長)で、三社が和解金約千八百六十万円を支払うことで和解が成立した。

和解金には建物の評価額の六割にあたる約千五百万円の算定に加え、夫婦への慰謝料百万円が盛り込まれた。訴状などによると、本田さんは一九九六年六月、同市長田区内の土地と建物を購入し、入居。約三カ月後からかび臭いにおいがしたり、壁面に染みができたため、九七年八月に防水・防腐工事を施した。約一カ月後、紀美代さんが足腰が立たず、下半身まひの状態となり入院。仁義さんも視力が急速に落ち、一時は声帯がまひした。化学物質による健康被害の専門治療を行う北里大学病院での診断を受けたところ、化学物質過敏症による中枢神経機能障害と判明。一九九九年に提訴に踏み切った。弁論の中で本田さん夫婦は「夫婦ともに健康だったのに、防水工事後に発症した。使われた有機溶剤や防腐剤が原因と考えられる」と訴えた。

提訴から約六年が経過。社会的にシックハウス症候群や化学物質過敏症の認知は進み、二〇〇三年には予防対策を含んだ改正建築基準法が施行している。

今もつえを使って生活する紀美代さんは「長く、つらい六年間だった。和解という形になったが、私たちの訴訟が同様の被害に遭う人の励みになってほしい」と話している。

2005年最後のアークフラッシュNEWSでした。本年は皆様のご協力有難うございました。来年もアークフラッシュグループは全精力を傾け環境問題に取り組んでいく所存です。今年以上の皆様のご協力をお願いいたします。

*** 発行責任者：株式会社アークフラッシュ本部**

笹川 透

03-5337-7275 FAX 5337-7465 honbu@arc-flash.com

1号～32号までを配信希望の方はメールにて申込ください。